

12. ^{99m}Tc -EHIDA を用いた十二指腸液胃内逆流診断法の評価

中西 敏夫 春間 賢 徳富 正
谷口 金吾 (広島大・放部)
佐藤 友保 桐生 浩司 勝田 静知
(同・放科)

胆汁あるいは膵炎を含む十二指腸液の胃内逆流は、胃潰瘍、胃炎あるいは食道炎などの種々の消化器疾患の成因と考えられている。

われわれは ^{99m}Tc -EHIDA 3 mCi を静注30分後に牛乳 180 ml と卵黄 1 個を服用させ生理的な状態で胆汁の胃内への逆流を観察した。対象は健康成人 8 例、胃潰瘍 12 例、胃十二指腸潰瘍 6 例、十二指腸潰瘍 6 例、残胃 7 例、胃癌 12 例、食道炎 4 例であり、そのうち胃内への逆流を認めたのは、残胃で全例 100%、胃、胃十二指腸潰瘍で 50% と高率であった。潰瘍の stage では、活動期で 100% と高率であった。今後逆流量の定量化や胃排泄時間との関連につきさらに検討中であり、潰瘍の成因、病態生理につき本誌は有用な検査法と考えられる。

13. 慢性膵炎における総胆管の形態的变化と胆道シンチグラフィ所見について

伊東 久雄 下野 礼子 渡部 真二
小糸 光 河村 正 石根 正博
飯尾 篤 浜本 研 (愛媛大・放)

慢性膵炎における総胆管膵部の形態的变化と、肝胆道シンチグラフィ所見(十二指腸出現時間および左右肝管への逆流現象)の関係の検討を行った。対象は正常例 12 例、慢性膵炎 22 例で ERCP 所見より MIP 10 例、MOP 7 例、ADP 5 例に分けた。5 mCi PMT 静注後 60 分間、さらにセルレイン 10 μg 筋注後 30 分間のデータ採取を行った。十二指腸出現時間は病期の進行とともに遅延する傾向がみられたが、正常例にも約 2 割で遅延し、特異的な所見とはいえなかった。逆流現象は、正常では見られず、また、総胆管の形態的变化をよく反映しているものと思われた。

14. I-123 摂取率による甲状腺疾患の鑑別

——複数回測定の有有用性——

藤田 安彦 杉村 和朗 加藤 博和
田中 寛 古川 雅彦 児玉 光史
杉原 正樹 内田 伸恵 岩崎 純夫
吉川 和明 起塚 裕美 笠井 俊文
石田 哲哉 (島根医大・放)

甲状腺摂取率を複数回測定し、同時期にホルモン検査を行った 39 症例について、至適摂取率測定時間、および摂取率複数回測定の意義について検討した。3 時間値と 24 時間値、5 時間値と 24 時間値の間には、1% の危険率で統計学的に有意の相関を認めた。各測定時間における摂取率とホルモンレベルの関係は、3 時間値、5 時間値、24 時間値のいずれも TSH を除いて、T3, Free-T4, T4, TSH において統計学的に 1% 以下の危険率で有意の相関を認め、甲状腺摂取率のみについて考えれば、早期摂取率測定で十分であった。一方、複数回測定からはヨードの turnover を反映した値を得ることができ、バセドウ病の診断、治療効果の判定に役立つ可能性が示唆された。

15. 副腎シンチ上、興味ある所見を呈した副腎腫瘍の 1 例

川井 康裕 原田 雅史 上野 淳二
須井 修 (徳島大・放)

巨大な副腎腫瘍に ^{131}I -Adosterol 副腎シンチグラフィを施行し、興味ある所見を認めたので報告した。症例は腫瘍の大きさ、血管造影所見、吸引生検から術前は癌と診断されたが、術後の病理組織所見では良性腺腫と診断されている。

しかし、腺腫と異なり癌にみられることのある多種の副腎皮質系ホルモンの上昇を認め、副腎癌の可能性を捨てきれなかった。

副腎皮質シンチグラフィでは腫瘍に一致した集積がみられたが、その程度は正常右副腎と考えられる集積よりも淡く、腫瘍への単位重量当たりの取り込みは低いと思われた。